

保健師のアセスメントを可視化して伝える家庭訪問映像教材に 対する教育者の意見

竹村 和子¹⁾ 塩見 美抄¹⁾ 井上 清美²⁾ 田村 須賀子³⁾
小寺 さやか⁴⁾ 伊藤 郁恵⁵⁾

要 旨

【目的】

保健師の家庭訪問における対象アセスメント技術を可視化して教授するための家庭訪問映像教材を製作した。本研究は、学生・新人保健師の教育者から、当該家庭訪問映像教材に対する意見を収集し、本教材の内容の適切性と活用可能性を明らかにすることを目的とする。

【方法】

本教材を視聴した保健師基礎教育を担当する教員および学生実習指導者や保健師現任教育担当者35名を対象に、アンケート調査を行った。

【結果・考察】

本教材のねらいは約9割前後が伝わったと回答し、学生や新人保健師の教材として8割以上が適切と回答している。9割以上が、本教材を今後活用したいと回答した。基礎教育の学生対象には、講義、演習、実習の事前学習などあらゆる場での活用が可能であるという回答があった。臨地実習において、学生は保健師との同行訪問を十分経験できていない現状、同行訪問を実施できても保健師のアセスメント技術を学ぶことは難しく、本教材はそれを補完することに役立つと考える。新人保健師と共に、保健師経験はあるものの、母子保健を初めて担当する者にも使えるという意見もあった。一方で、双胎・低出生体重児の事例が難しい、アセスメントに対する解説が不足しているなどの意見もあり、本教材のみですべてをカバーすることは難しく、他の資料や説明や資料を加えるなどの工夫が必要である。今後、実際基礎教育の場や現任教育の場で使用、検証を重ね、教材の内容、使用方法について再検討が必要である。

キーワード：アセスメント、保健師基礎教育、新人保健師教育、映像教材、家庭訪問

1) 兵庫県立大学看護学部 地域看護学
2) 神戸常盤大学保健科学部
3) 富山大学大学院 医学薬学研究部
4) 神戸大学大学院 保健学研究科
5) 島根大学大学院 医学系研究科 医科学専攻修士課程

I. はじめに

近年急速に変化する社会において、地域の健康課題が広範囲に及び、複雑・多様化している。保健師には地域の問題を顕在化させる役割とともに、それらに対応する高度な実践能力が求められている。厚生労働省¹⁾は「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」を5項目設定し、その1番目を「地域の健康課題を明らかにし、解決・改善策を計画立案する能力」とした。卒業時の到達目標として、大項目「地域の健康課題を明らかにし、解決・改善策を計画・立案する」を挙げ、中項目の最初に「地域の人々の生活と健康を多角的・継続的にアセスメントする」を、以下続く7つの小項目に情報収集・アセスメントを挙げている。学生は卒業時に個人・家族や集団・地域の生活や健康のアセスメントを、少しの助言で自立して実施できるレベルまで求められている。しかし、地域においては収集する情報が多く、アセスメントも多岐にわたるために、学生には習得に時間を要する技術であり、卒業時のその達成度は高くはない²⁾。新任期にあたる保健師においてもその支援技術の十分な習得は難しく³⁾、新人保健師の困難感につながっている可能性が考えられる。

学生にとって、目に見えない保健師の対象アセスメント技術を、テキストや講義から理解することは容易ではない。学生がアセスメント技術を理解し習得していくためには、学外実習で実際の保健師活動を題材にして学生に学ばせるだけではなく、学内の講義や演習に於いてその技術を可視化して伝える必要がある。

そこで、保健師の家庭訪問における対象アセスメント技術を可視化して教授するための家庭訪問映像教材（以下DVD教材とする）を製作した。本研究では、学生・新人保健師の教育者から、本DVD教材に対する意見を収集し、本DVD教材の内容の適切性と活用可能性を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 用語の定義

アセスメント：地域看護活動の方向性や目標を明確にすることを目的とした保健師の思考および行為

2. 本DVD教材について

1) 本DVD教材のねらい

以下の3点をねらいとし、本DVD教材を製作した。

- ① ニーズのアセスメントをする上で基本となる考え方・大事にすべき価値を、映像を通じて理解することができる。
- ② ニーズをアセスメントするための視点と方法を具体的に（どのような場面でどう把握するのかまで）理解できる。
- ③ ニーズを見出すための看護者（保健師）のコミュニケーションの実際をイメージ化することができる。

※ニーズ：対象のQOLの向上のために必要なもの・こと。

※ニーズのアセスメントをする上で基本となる考え方：対象の生活の場に身を置き、暮らしの様子を感じながら対象をアセスメントすることなど

※ニーズのアセスメントをする上で大事にすべき価値：対象を全体で捉える、対象と共に解決方法を考える等

2) DVD教材について

(1) 本DVD教材開発における検討内容

教材の開発にあたり、研究会議、研究班員間の個別の打ち合わせ等による意見交換を通じて検討を重ねた。

家庭訪問事例の検討においては、実際の保健師の家庭訪問によくある事例でかつ新任期から関わることの多い母子事例とした。身体的な健康課題が見える事例でかつ学生にも理解可能な重症でない双胎・低出生体重児の事例とした。

シナリオの作成にあたっては、設定した事例によく起こり得る状況を描くよう配慮し、対象との対話の中で対象のニーズを明らかにしていく過程をシナリオにした。また、家族全体を見る視点を表現できるような内容にした。シナリオは、保健師の研究会や大学教員の研究会の場で提示し、専門的な意見を受けて検討・修正を重ねた。

(2) 本DVD教材の内容

本DVD教材は「電話連絡と事前情報の収集」「家庭訪問基本の流れ」「家庭訪問の展開」の3場面構成とした。内容は以下の通りである。

① 場面1「電話連絡と事前情報の収集」(6分30秒)

家庭訪問の数日前に対象に電話連絡をしている場面を見せながら、保健師が家庭訪問前に必要な情報をどのように収集するのか、そこから何がわかるのかを解説している。

② 場面2「家庭訪問基本の流れ」(5分30秒)

家庭訪問計画の立案から、訪問当日の準備、訪問の道中での地区踏査、対象者宅での家庭訪問の展開、訪問後の記録といった、基本的な家庭訪問の流れを紹介している。

③ 場面3「家庭訪問の展開」(18分)

家庭訪問場面で、保健師が対象と対話している場面を見せながら、保健師がどのような情報をどのようににアセスメントし、支援しているのかを解説している。

(3) 本DVD教材作成時に特徴とした点

以下の3点を留意し、本DVD教材を作成した。

- ① 保健師の実践活動の中でよくある事例に設定した。
- ② 保健師と家庭訪問対象とが対話する場面を多く映像化するように考案した。
- ③ 映像の要所で、保健師が頭の中でどのようにアセスメントしているのかを解説するようにした。

3. 研究対象者

本DVD教材を視聴した保健師基礎教育を担当する教員および学生実習指導者や保健師現任教育担当者。

4. データ収集

1) 収集方法

無記名自記式のアンケートを用いた調査を行った。アンケート回答は以下の二通りの方法を設定した。

- (1) ホームページ上のアンケートフォームによる回答
所属研究室のホームページにて、本DVD教材の紹介と保健師基礎教育または現任教育での使用、および大学

等の教育機関及び地方自治体等に限る、本DVD教材の配布について、ホームページから申し込みを受け付けた。その申し込み者に、本DVD教材を送付するとともに、ホームページ上でのアンケート回答に対する研究協力依頼書とホームページでの回答方法の説明文を同封した。

- (2) 学会の自由集会もしくは保健師教育に携わる教育・研究者が集まる研究会でのアンケート用紙による直筆での回答

上記にて、本DVD教材を上映するとともに、研究協力依頼を行い、その場での直筆での回答用紙を回収した。その場で回答できない場合は、後日ホームページ上での回答でも可能と伝えた。

2) 調査期間

平成25年9月～12月

5. 分析方法

得られたデータの内、選択式の質問に対するデータは単純集計およびクロス集計し、数量化して分析した。記述式のデータは、記載内容の意味を質的に読み取り分析した。

6. 倫理的配慮

研究協力の自由や匿名性の保証などの倫理的配慮は、依頼文書内に記載し、学会の自由集会と研究会参加者には口頭でも説明をした。研究協力同意に関しては、アンケート回答にて同意したとみなすことを依頼文書内および口頭にて伝えた。アンケート回答はホームページでの回答は無記名で行ったうえ、SSL暗号化通信に対応したフォームメーカーを使用し、直筆の場合は無記名のため、どちらの方法も回答者が特定できないようになっている。また、学会自由集会と研究会でのアンケート回収は、会場の外に回収用封筒を設置し、研究メンバーがその場に立ち会わないようにし、アンケート回答提出者が特定できないように配慮した。アンケートに回答しない場合も、DVD教材は使用目的を厳守するという同意事項に同意した上で手渡しおよび郵送した。

本研究は兵庫県立大学看護学部の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

アンケートは配布数65に対し、35名からの回答を得ることができた。回収率・有効回答率ともに53.8%であった。

1. 回答者の属性（表1）

回答者の職種は表1の通りである。

回答者のうち24名（68.6%）が大学・大学院の教員で

表1 回答者の職種 N=35

	人	割合 (%)
大学・大学院教員	24	68.6
都道府県保健師	5	14.3
市町村保健師	4	11.4
その他	1	2.9
無回答	1	2.9
合 計	35	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

あり、9名（25.7%）が行政保健師であった。その他と無回答が1名ずつであった。

2. DVD教材の内容について

本DVD教材を視聴し、ねらいがどの程度伝わったかを表2に示す。「保健師が個人・家族のニーズをアセスメントする上で基本となる考え方や大事にすべき価値」が「よく伝わった」と回答したのは21名（60.0%）、「少し伝わった」と回答したのは9名（25.7%）であった（表2-1）。「保健師が個人のニーズをアセスメントするための具体的な視点と方法」が「よく伝わった」と回答したのは18名（51.4%）、「少し伝わった」と回答したのは12名（34.3%）であった（表2-2）。「保健師が個人・家族のニーズを見出すためのコミュニケーションの実際」が「よく伝わった」と回答したのは22名（62.9%）、「少し伝わった」と回答したのは11名（31.4%）であった（表2-3）。

表2 DVDを視聴することで1)～3)の内容がどの程度伝わったか

1) 保健師が個人・家族のニーズをアセスメントする上で基本となる考え方や大事にすべき価値

		よく伝わった	少し伝わった	あまり伝わらなかった	無回答	合 計
職 種 別	大学教員 (人)	13	6	4	1	24
	割 合 (%)	54.2	25.0	16.7	4.2	100.0
	保健師 (人)	6	3	0	0	9
	割 合 (%)	66.7	33.3	0.0	0.0	100.0
	無回答・その他 (人)	2	0	0	0	2
	割 合 (%)	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
全 体	人	21	9	4	1	35
	割 合 (%)	60	25.7	11.4	2.9	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

2) 保健師が個人のニーズをアセスメントするための具体的な視点と方法

		よく伝わった	少し伝わった	あまり伝わらなかった	無回答	合 計
職 種 別	大学教員 (人)	12	7	4	1	24
	割 合 (%)	50.0	29.2	16.7	4.2	100.0
	保健師 (人)	4	5	0	0	9
	割 合 (%)	44.4	55.6	0.0	0.0	100.0
	無回答・その他 (人)	2	0	0	0	2
	割 合 (%)	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
全 体	人	18	12	4	1	35
	割 合 (%)	51.4	34.3	11.4	2.9	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

3) 保健師が個人・家族のニーズを見出すためのコミュニケーションの実際

		よく伝わった	少し伝わった	あまり伝わらなかった	無 回 答	合 計
職 種 別	大 学 教 員 (人)	16	6	1	1	24
	割 合 (%)	66.7	25.0	4.2	4.2	100.0
	保 健 師 (人)	4	5	0	0	9
	割 合 (%)	44.4	55.6	0.0	0.0	100.0
	無回答・その他 (人)	2	0	0	0	2
	割 合 (%)	100.0	0.0	0.0	0.0	100.0
全 体	人	22	11	1	1	35
	割 合 (%)	62.9	31.4	2.9	2.9	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

職種別では、大学・大学院教員（以下大学教員）は、全ての項目について、12～16名（50～66.7%）が「よく伝わった」と回答している。一方、全ての項目に「あまり伝わらなかった」と1～4名が回答している。都道府県保健師・市町村保健師の行政保健師（以下保健師とする）は、すべての項目について4～6名（44～66%）が「よく伝わった」と回答している。

3. 学生や新人保健師向け教材の事例の適切性

学生や新人保健師向け教材の事例の適切性についての回答を表3に示す。「大変適切であった」と回答したのは12名（34.3%）、「まあ適切であった」と回答したのは19名（54.3%）であった。

職種別にみると、大学教員は、「大変適切だった」が7名（29.2%）回答、「まあ適切だった」と13名（54.2%）が回答し、合せて80%以上が「適切」と回答した。一方「あまり適切ではなかった」と3名が回答した。保健師は「大変適切だった」と4名が、「やや適切だった」と5名が回答した。大学教員で「適切」と回答した意見には、「基本が押さえられる」「保健師の意図がわかりやすい」などがあり、「あまり適切ではない」と回答した意見には、「事例設定（双子）がやや難しい」が挙げられた。保健師で「適切」と回答した意見には「目の前にある情報だけでなく、物事を想像・推察しなければよりよいケアができないことが伝わってきた」「実際の家庭訪問は母子事例が多い（学生や新人保健師が会いやすい）」などがあり、「適切でない」という回答はなかったが、「学生には適切だが、新人には物足りない」「もう少し解説があってもよい」という意見もあった。保健師の回答には双子事例設定に関する記載はなかった。

表3 学生や新人保健師向けの教材の適切性

		大変適切だった	まあ適切だった	あまり適切でなかった	無 回 答	合 計
職 種 別	大 学 教 員 (人)	7	13	3	1	24
	割 合 (%)	29.2	54.2	12.5	4.2	100.0
	保 健 師 (人)	4	5	0	0	9
	割 合 (%)	44.4	55.6	0.0	0.0	100.0
	無回答・その他 (人)	1	1	0	0	2
	割 合 (%)	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0
全 体	人	12	19	3	1	35
	割 合 (%)	34.3	54.3	8.6	2.9	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

4. 場面ごとの学生や新人保健師向けの教材の適切性

場面ごとの学生や新人保健師向けの教材の適切性についての回答を表4に示す。「場面1：『電話連絡と事前情報の収集』」では、「大変適切だった」と回答したのは18名（51.4%）、「まあ適切だった」と回答したのは13名（37.1%）であった（表4-1）。「場面2：『家庭訪問基本の流れ』」では、「大変適切だった」と回答したのは13名（37.1%）、「まあ適切だった」と回答したのは18名（51.4%）であった（表4-2）。「場面3：『家庭訪問の展開』」では、「大変適切だった」と回答したのは11名（31.4%）、「まあ適切だった」と回答したのは17名（48.6%）であった（表4-3）。

職種別にみると、大学教員は、どの場面も「大変適切だった」「まあ適切だった」を合わせると、18～22名（75～93.3%）が「適切」と回答している。しかし、「大変

適切だった」「まあ適切だった」を合わせると、18～22名（75～93.3%）が「適切」と回答している。しかし、「大変

表4 場面ごとの学生や新人保健師向けの教材の適切性

1) 場面1：電話連絡と事前情報の収集

		大変適切だった	まあ適切だった	あまり適切でなかった	無回答	合計
職種別	大学教員(人)	14	6	3	1	24
	割合(%)	58.3	25.0	12.5	4.2	100.0
	保健師(人)	3	6	0	0	9
	割合(%)	33.3	66.7	0.0	0.0	100.0
	無回答・その他(人)	1	1	0	0	2
	割合(%)	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0
全体	人	18	13	3	1	35
	割合(%)	51.4	37.1	8.6	2.9	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

2) 場面2：家庭訪問基本の流れ

		大変適切だった	まあ適切だった	あまり適切でなかった	無回答	合計
職種別	大学教員(人)	9	12	2	1	24
	割合(%)	37.5	50.0	8.3	4.2	100.0
	保健師(人)	4	4	1	0	9
	割合(%)	44.4	44.4	11.1	0.0	100.0
	無回答・その他(人)	0	2	0	0	2
	割合(%)	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
全体	人	13	18	3	1	35
	割合(%)	37.1	51.4	8.6	2.9	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

3) 場面3：家庭訪問の展開

		大変適切だった	まあ適切だった	あまり適切でなかった	無回答	合計
職種別	大学教員(人)	8	10	5	1	24
	割合(%)	33.3	41.7	20.8	4.2	100.0
	保健師(人)	3	5	0	1	9
	割合(%)	33.3	55.6	0.0	11.1	100.0
	無回答・その他(人)	0	2	0	0	2
	割合(%)	0.0	100.0	0.0	0.0	100.0
全体	人	11	17	5	2	35
	割合(%)	31.4	48.6	14.3	5.7	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

適切だった」には、8～14名（33.3～58.3%）と偏りがあった。一方、3場面とも「あまり適切ではなかった」と2～5名が回答している。大学教員の各場面に関する意見として、「細切れにしているので、途中で説明を入れることが可能であり、工夫されている」、「具体的な展開方法が分かりやすかった」、「実際授業で使用してみて、学生は保健師の姿勢、対応、判断の視点など具体的に記述できていた」という意見があった。一方で、「もう少しアセスメントに特化した内容や解説があった方がよい」、「アセスメントの内容に焦点化しているためか、実際の対応方法があいまいなまま終わるように思う」という意見があった。保健師は、「家庭訪問の流れ」では、「あまり適切ではなかった」と1名回答したが、それ以外は「大変適切だった」「まあ適切だった」のいずれかに回答している。各場面に関する意見は、「基本的なことがよくわかる」という意見があった一方で、「児の観察方法・手技の具体的な説明が必要」、「双胎児に対する大変さを伝えるのではなく、まず母親の話を聞いてから共感

することが必要」などの意見が挙げられた。

5. 本DVD教材の保健師基礎教育・現任教育への活用

本DVD教材の活用についての回答を表5に示した。本DVD教材を「保健師基礎教育や現任教育に活用したいか」という問いに、32名（91.4%）が、希望すると回答した（表5-1）。場面ごとでは、「場面1：『電話連絡と事前情報の収集』」を「活用したい」と回答したのは28名（80.0%）、「場面2：『家庭訪問基本の流れ』」を「活用したい」と回答したのは25名（71.4%）、「場面3：『家庭訪問の展開』」を「活用したい」と回答したのは24名（68.6%）であった。大学教員は、各場面15～18名（62.5～75.0%）が活用したいと回答した（表5-2）。

「活用したい」と回答した理由として、「視覚で伝えると学生の頭に残りやすい」「保健師の思考過程を具体的に理解できる」「訪問途中の地区把握は活用できる」

表5 DVDの保健師基礎教育・現任教育への活用の可能性について

1) 本DVDを保健師基礎教育や現任教育に活用したいか

		ぜひ活用したい	活用したいと思わない	無 回 答	合 計
職 種 別	大 学 教 員 (人)	21	2	1	24
	割 合 (%)	87.5	8.3	4.2	100.0
	保 健 師 (人)	9	0	0	9
	割 合 (%)	100.0	0.0	0.0	100.0
	無回答・その他 (人)	2	0	0	2
	割 合 (%)	100.0	0.0	0.0	100.0
全 体	人	32	2	1	35
	割 合 (%)	91.4	5.7	2.9	100.0

※小数点第二位以下は四捨五入

2) 本DVDの場面で使えるような場面（複数回答可）

		場面1： 電話連絡と事前情報の収集	場面2： 家庭訪問基本の流れ	場面3： 家庭訪問の展開
職 種 別	大 学 教 員 (人)	18	15	16
	割 合 (%)	75.0	62.5	66.7
	保 健 師 (人)	8	8	6
	割 合 (%)	88.9	88.9	66.7
	無回答・その他 (人)	2	2	2
	割 合 (%)	100.0	100.0	100.0
全 体	人	28	25	24
	割 合 (%)	80.0	71.4	68.6

※小数点第二位以下は四捨五入

「言語化されたもの以外の情報や想像することの大切さ、共感について盛り込まれていた」「実際に講義で活用し、学生の理解度が高かった」が挙げられた。「活用したいと思わない」と回答した理由は、「発育・発達などの具体的なアセスメント技術についての場面や説明がない」などが挙げられた。

活用できそうな場としては、保健師基礎教育課程に於いては、活用時期として、学部2回生5人、学部3回生12人、学部4回生10人（複数回答）が挙げられた。活用の場としては、講義、演習、実習の事前学習などが挙げられた。現任教育では、新人保健師対象教育5人（複数回答）が挙げられたが、中には「就職して経験年数が経ってから初めて母子保健を担当する保健師にも活用できる」という回答もあった。

IV. 考 察

1. DVD教材の適切性

DVD教材のねらいを3つ設定していたが、いずれについても、90%前後の教育者がDVD教材を通して伝わったと回答しており、特に、「保健師が個人・家族のニーズを見出すためのコミュニケーションの実際」を伝わったとする教育者は90%を超えていた。山田ら⁴⁾は、学生の地域看護実習における家庭訪問での学びの一つに「ニーズ把握に向けたコミュニケーション技術」を挙げており、実際の場面を見ることで初めて学べる内容であると言える。保健師の家庭訪問ケースが複雑困難化し件数が減少する中、学生の家庭訪問同行の機会の確保が困難になっている。本DVD教材には、学生が実習の少ない機会の学びの準備性を高める効果があったと考える。

学生や新人保健師向けの教材としての適切性に対して34.3%が「大変適切であった」と回答し、「まあ適切だった」と回答した人は54.3%であり、合わせて88.0%が「適切であった」と回答している。今後の保健師基礎教育や現任教育への活用についても「活用したいと思う」が91.4%に上った。家庭訪問は、保健師の重要な地区活動の一つでありながら、学生は実習にて経験できていない現状⁵⁾や、実習施設における保健師の少なさから、保健師や教員が学生指導に十分な時間をかけられていない現状もある。したがって、学生が経験する内容を

意味づけるためにも、学内での講義・演習を強化する必要があり、本DVD教材は、その一端を担うと考える。また、保健師のアセスメント技術の一つひとつ丁寧に解き明かしていくことは実習の場でも難しく、目に見えない保健師の対象アセスメント技術は学生にはイメージしづらい。本DVD教材が学生のイメージ化を助けることができるとも考える。

また、重要なところで止められる、反復して視聴できるなど、DVD教材ならではの強みもあると考える。

DVD教材の事例設定の適切性については、80%超える教育者が適切であると回答していたが、理由の自由記載からは、双生・低出生体重児という設定に対し、学生には難しすぎるとの意見も見られた。看護の対象者は、健康課題を抱えた生活者であり⁵⁾、対象の看護の方向性を見出すためのアセスメントは、対象者の疾患や病態のみに偏らず、生活の視点で捉えることが重要である⁶⁾。しかし、大半の学生が経験したことのない新生児・乳児がいる生活をイメージすることは容易でなく、明らかな疾患や健康問題を入りに事例の特性を理解し、その生活へと視点を広げていく思考が、初学者には合致していると考える。また、双胎妊娠や低出生体重児の抱えるリスクについては、本DVD教材のみで理解することは難しく、講義やDVD教材の解説等で補う必要があると言える。

DVD教材の3つの場面の適切性については、いずれも80%程度の教育者が適切と回答しており、「場面1：『電話連絡と事前情報の収集』」を「大変適切」とする割合が最も高かった。保健師は、あらゆる支援の場を通じて対象のニーズの明確化につながる情報を収集しており、本DVDの家庭訪問事例のアセスメントにおいても、訪問場面の前段階である電話連絡の時点からアセスメントが始まることの理解を促す場面構成になっていたと考える。その意味において、本DVD教材は、学生や新人保健師に「個」を丁寧にアセスメントする視点と方法を可視化して伝えることに適した教材であったと考える。

2. DVD教材の教育への活用可能性

全体のうち32名（91.4%）が、今後本DVD教材の使用を希望すると回答し、各場面とも約70～80%が「活用

したい」と回答している。これは、本DVD教材は活用可能性が高いと考える。活用したいと考える理由として「視覚で伝えると学生の頭に残りやすい」「保健師の思考過程を具体的に理解できる」という意見が挙げられた。これは本DVD教材のねらいと共通している点であり、ねらいが伝わるような内容であったと考える。本江ら⁵⁾は、対象者の生活の場に出向き、アセスメントを行うということは、臨地実習でなければ経験しにくい学習であるが、視聴覚教材を用いることにより、実習に近い学習環境が得られると述べている。本DVD教材に対し、「言語化されたもの以外の情報や想像することの大切さ、共感について盛り込まれていた」という意見があった。本DVD教材を視聴することにより、対象者を身近に感じることができ、実習に近い学習環境を提供できるものではないかと考える。

一方で、各場面に対して、「アセスメントに特化した内容や解説があった方がよい」という意見や、「活用したくない」と回答した理由に「発育・発達などの具体的なアセスメント技術についての場面や説明がない」という意見もあった。本DVD教材だけで、家庭訪問における保健師のアセスメント技術を全て網羅することは難しく、教育場面で目的に沿って使用されることが望ましいと考える。この点を教育者に伝え、より有効に活用されるような工夫の検討が、今後必要である。活用できる対象および場面は、学部1年生～4年生の講義・演習・実習の事前学習、新人保健師、中には保健師経験はあるが母子保健の経験がない保健師対象の現任教育にも活用できるという意見があった。このことから、教育者のアイデアによって、基礎教育および経験の浅い保健師等様々な対象・場で活用できると考える。

3. 本研究の限界と今後の課題

本DVD教材は、基礎教育課程の学生や新人保健師対象とした教材として、適切であり、今後活用される可能性が高いと考える。しかし、意見収集できた教育者は35名と少なく、一般化するには難しい。実際に教育に使用してみるという検証を重ね、本DVD教材の内容や使用方法などの再検討を行うことも必要である。

V. 結 論

保健師の家庭訪問における対象アセスメント技術を可視化して教授するための家庭訪問映像教材を製作し、学生・新人保健師の教育者から、本教材に対する意見を収集し、本教材の内容の適切性と活用可能性を明らかにすることを目的とした。

本教材のねらいは約9割前後が伝わったと回答し、学生や新人保健師の教材として8割以上が適切と回答している。9割以上が、本教材を今後活用したいと回答した。基礎教育の学生対象には、講義、演習、実習の事前学習などあらゆる場での活用が可能であるという回答があった。一方で、双胎・低出生体重児の事例が難しい、アセスメントに対する解説が不足しているなどの意見もあり、本教材のみですべてをカバーすることは難しく、他の資料や説明や資料を加えるなどの工夫が必要である。今後、実際基礎教育の場や現任教育の場で使用、検証を重ね、教材の内容、使用方法について再検討が必要である。

謝辞：本DVD教材を視聴し、アンケートにおいて貴重な意見を賜りました教育者の皆様にお礼申し上げます。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)「保健師学生の対象アセスメント能力の向上を意図した視聴覚教材の開発」(研究代表者：塩見美抄)の研究成果の一部である。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会第一次報告2010. (オンライン) 入手先<<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000013l6y-att/2r98520000013lal.pdf>>, (参照2014-10-14).
- 2) 石井敦子他. 「保健師教育における技術項目と卒業時の到達度」の自己評価と地域看護実習の課題. 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要. (9), 2013, 51-62.
- 3) 鈴木知代他. 新任期保健師の個人・家族支援能力向上のための研修の評価. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 20, 2012, 11-20.
- 4) 山田淳子他. 地域看護学実習における学生の学びからみた家庭訪問実習の効果と課題. Journal of Japan Academy of Community Health Nursing. 11(1), 2008, 81-86.
- 5) 本江朝美他. オリジナル視聴覚教材を用いたアセスメント能力育成に関する教育方略ーローパー・ローガン・ティアニー看護モデルの導入ー. 上武大学看護学部紀要. 6(1), 2010, 1-18.
- 6) 荒賀直子. 公衆衛生看護概論. 公衆衛生看護学. jp. 荒賀直子他編. 第3版. 東京, インターメディカル, 2011, 7.

Educators' Opinions about Audiovisual Educational Material for Teaching Public Health Nurses' Assessment Skills in Home Visiting

TAKEMURA Kazuko¹⁾, SHIOMI Misa¹⁾, INOUE Kiyomi²⁾, TAMURA Sugako³⁾
KOTERA Sayaka⁴⁾, ITO Ikue⁵⁾

Abstract

[Purpose]

The purpose of this study was to collect educators' opinions regarding audiovisual teaching material for home visiting to visualize the assessment skills of public health nurses.

[Methods]

A questionnaire survey was conducted with 35 nursing educators.

[Results/Discussion]

About 90% of educators answered that they recognized the aim of the material. Over 90% of educators indicated that they intended to use the material. The material may be used in lectures, seminars, and preparations in advance of practice, and can even be used by new public health nurses and experienced public health nurses with less experience of supporting mothers and children. According to other opinions, the material may be very difficult for baccalaureate nursing students, and there would be a lack of explanation for the skills of public health nurses. Future studies should be conducted to examine and review how to use/teach the material as well as to investigate additional materials.

Key words : assessment ; baccalaureate public health nursing education ;

education for new public health nurses ; audiovisual teaching materials ; home visiting

1) Public Health Nursing, College of Nursing Art and Science, University of Hyogo

2) Department of Health Science, Kobe Tokiwa University

3) Graduate School of Medicine and Pharmaceutical Sciences for Research, University of Toyama

4) Graduate School of Health Science, Kobe University

5) Master's course, Graduate School of Medical Research, Shimane University